

不登校・ひきこもりに『伴走』して

NPO 法人レインボーハウス 土井 広行

第7回 けんか大歓迎、お笑い大歓迎

Aくん「そろそろかわってや」

Bくん「また後でな」

Aくん「さっきからそればかり言って、全然かわってくれへんやん！」

Bくん「しゃあない（仕方ない）やん！」

これは遊び道具の順番をめぐるのですが、けんかの原因は様々です。私から見れば些細な原因でも、子どもたちは真剣です。

けんかが始まっても、傍にいる私は何もせず見ているだけです。相手の権利を著しく侵害したり殴り合いにでもならない限り、口を出すことはありません。「コラ！けんかはあかんで！」「あと 10 分したら交代しよう」など先回りしてけんかをとめたり、仲裁したりはしません。

来てくれた当初は緊張して遠慮していた子どもが、やがて新しい場所・新しい人間関係に慣れ、自分を出せるようになってきます。他の子どもと関わる中で、お互いに出し合った自分がぶつかることがあります。ここで、相手に合わせて自分は我慢するばかりではなく、自分も大事にするために自己主張して対等に言い合うことがけんかです。けんかもすることで、お互いの嫌がることやちょうどよい距離が少しずつわかっていくのではないのでしょうか。

また、レインボーハウスにはおもしろいことを言って周りを笑わせてくれる子どももいます。自分がおもしろいと思うことを言って誰かと笑いを共有することは、お互いの距離を一気に縮めたり、人とつながっていく喜びを実感する貴重な場面でもあります。

しかし、けんかと笑わせることには、自分が嫌われるかもしれないリスクも伴います。けんかは、他の子どもとの関係が悪化するかもしれません。笑わせることに関しては、失敗すると誰にも相手にされなくなることも考えられます。嫌われないように周りに気を遣ってばかりで、自分を押し殺してきた多くの子どもにとって、嫌われるリスクを覚悟でのけんかや笑わせることは、まさに冒険そのものなのです。

「けんかもするし、笑わせることも言う自分」をさらけ出しても、周りから否定されず認められる機会を重ねることが、しなやかな人間関係を築いていくためには必要だと思うのです。対等に言い合うことでけんかもできて、周りを笑わせることも安心して言えるような、そんな場所こそが「居場所」なのです。

< 2007年 8月 4日 ニュース和歌山掲載 >